平成23年10月18日

第９回最上小国川流域環境保全協議会の開催概要について

標記の環境保全協議会について下記のとおり開催しました。

第９回環境保全協議会では、第７回で提示した付着藻類影響検討フローに基づく「付着藻類への影響検討」に関する濁りによる付着藻類への影響や、「今後の環境調査予定」に関連するモニタリング調査の方針（案）について、詳細を説明し御意見をいただきました。

具体的には「第８回協議会における指導事項と対応」「平成２３年度環境影響調査の中間報告」「付着藻類への影響検討」「今後の環境調査予定」について説明し、各委員から活発な御意見をいただきました。

記

１　日　時　平成２３年１０月１８日（火）　　１３：３０ ～ １５：３０

２　場　所　最上総合支庁５階講堂

３　出席者　１２名（全員出席）

原委員長、伊藤委員、今井委員、梅田委員、大場委員、萱場委員
小林委員、柴田委員、野口委員、柳原委員、矢野委員、横倉委員

４　各委員からの主な御意見

・今井委員　【猛禽類調査】
・今回の調査結果からも、現時点ではダム事業と猛禽類は共存が可能と言える。

・萱場委員　【付着藻類への影響】
・ダムありなしで濁りの状況に差の出る3年に1回規模以上洪水では付着藻類は剥離するため、濁りの影響は小さいと考えられる。

・川の地形を作るのは3年に一回程度の洪水と言われている。洪水の継続時間についても、3年に一回程度のよくある洪水はダムあり･なしでほとんど差が無いことがわかる。30、50年に一回程度の洪水では、特にSS1000mg/lの継続時間がダムありの方が長くでており、どう解釈するかが課題として残るが、水理学的に考えると、無機物の上に非常に細かい成分は溜まらないと考えられる。

・原委員長　【工事中の濁り発生】
・工事初期の濁りの発生について、地元の方々も特に注視するため、濁りが発生しない対応を検討する必要がある。

・横倉委員　【昆虫類調査】
・ワタナベカレハは全国的に見ても貴重ではあるが、最上町では全国でもトップクラスと呼べる程生息しているようだ。また、今回の調査はダム付近の生息を良く把握できている。

【開催概況】